

陣野英則著『源氏物語の話しと表現世界』

榎 本 正 純

編集委員会から本書の書評執筆の依頼があったとき、正直、ためらいがなかったわけではない。というのも、これまで書評の依頼をかくく断りつづけてきたという経緯があったからである。とにかく源氏学の現在にとつて待たれていた著書だと思量されたことが戒を破つて承引するにいたつた理由のひとつである。

源氏物語には二分法では律し切ることのできない、いわばグレーゾーンとでもいふべき表現がきわめて多い。王朝女流文学に特徴的な表現だといつてもよいが、こうした表現をめぐつて、その解釈に振幅のあることも事実である。複雑に読みの分かれる大きな要因にもなっている。この物語にしきるグレーゾーンとでも呼びたい表現の解明がまたれるゆえんであるが、その意味でも本書刊行の意義は大きいのである。

本書は、早稲田大学大学院文学研究科に提出された学位請求論文「源氏物語論——表現の諸相と物語の論理——」を「補正」して編まれた。その構成は、次の通りである。

序章 「源氏物語」の言葉といかに向きあうか

I 「源氏物語」の話し

第一章 作中人物の話しと「語り手」——重なりあう話しと様相——

第二章 「源氏物語」古注釈における本文区分——光源氏物語沙を中心に——

第三章 「源氏物語」の「語り」の本性——作中人物どうしの話しと重なりあい——

第四章 女房の話しとその機能——「末摘花」巻の大輔命婦の場合——

第五章 「語り手」の待遇意識——貴公子に対する待遇表現——

II 光源氏をめぐる「語り」——第一部とその前後——

第六章 光源氏をもどく、鬚黒——出来損ないの「色好み」が拓く物語世界——

第七章 六条院世界をみつめる明石の君——明石の尼君の待遇表現の分析から——

第八章 秋好中宮と光源氏——第二部における二人の関係性をめぐつて——

第九章 六条御息所の死霊と光源氏の罪——死霊の語つた言葉の分析から——

第十章 「柏木・女三の宮事件」後の「語り」——薫生と女房たちの沈黙——

第十一章 光源氏の最後の「光」——「幻」巻論——

第十二章 「光源氏の物語」としての「匂宮三帖」——「光隠れたまひにし

のち」の世界——

III 「源氏物語」の話しと「書く」こと——物語世界を超えて——

第十三章 紫式部という物語作家——物語文学と署名——

第十四章 物語作家と書写行為——「紫式部日記」の示唆するもの——

第十五章 「源氏物語」と書写行為——書写者の話し——

第十六章 「源氏物語」と唐代伝奇——物語伝承の仮構の方法——

第十七章 「源氏物語」のヘテロフォニー——重なりあう話しと読むこと——

II では、ひたすら物語世界の内部の表現の諸相の分析と物語の論理を考究する。第一章「作中人物の話しと「語り手」」では、これまでの説にも目配りしつつ、さまざまの話しと重なり、語り手の位相について検討し、その結果を六項目に整理している。いくつかを紹介しよう。

・『源氏物語』の本文を厳密に区分することは不可能といつてよい。〈草子地〉は、その顕著な例であるが、内話とへ地の文、内話とへ草子地なども区分しえないことが多い。しかし、本文の区分を意識することにより、さまざまな話声の重なりが見出されてくる。よつて、区分を試みることに意義がある。

・編集する〈語り手〉を実体的にとらえることに無理がある。物語世界の内部には、現実世界の物語の伝播状況に類するものが設定されている。したがつて、幾重にも話声が重なつづけているテキストとしてとらえるべきである。

前者は、まったくその通りで、「区分」しがたいところにこそこの物語の表現の特質があるのである。後者についても、この物語は〈語りの場〉をテキストに内在させているわけであるから、納得がゆく。〈語り手〉を实体概念としてとらえない方がよいという見解も、源氏物語の実際に最もよくかなつていて同感である。『話声』(narrative voice)というからには、強弱といったコトバで説明がなされるのは理解できるが、著者には、ベクトル・距離等といった観点からの検証ものぞみたい。

ついつつかり見落としがちな貴重な指摘のひとつが第三章。作中人物(光源氏)が他者の心中を把握しているかに見られる表現をきまこまかく分析し、「他者の話声と光源氏の話声だけではなく、〈語り手〉の話声が重なっているとみるべきであろう。……それにしても、一人の人物が他者の心中を把握してしまつたかのような叙述それ自体は、物語の〈語り〉の本質的なありようと照

応すべき重要性を孕んでいる」と指摘する。微妙な問題を含むが、こうした観点を援用しないかぎり説明のつかない表現がこの物語にはあるのである。

著者が学ばれることのあつたはずの森一郎氏との柏木・夕霧・鬘黒に関する「〈語り手〉の待遇意識」をめぐる好意的かつ節度のある応酬は、源氏物語の表現の特質が顕在化されたという点でもきわめて印象深い(第五章)。著者の謙虚な態度が論の正当性をより確かなものにしてゐる。

Ⅲでは、物語世界の内部から外部へと眼を転じ、物語作家や書写者の問題を真正面から取り上げて検討する。作品の読み解きに物語作家Ⅱ「現実の作者」を持ち込んで立論するという論文はほとんど見られない、というのが源氏学の現在である。にもかかわらず著者が物語作家や書写者を大きく視野に入れて立論されている、その勇氣と見識にまず敬意を表したい。「あらためて物語作家の創作意図などを絶対化するつもりはない。テキスト論の有効性はお失われていないだろう。だが、一方で、『源氏物語』をテキストとして論じることによつて、テキストの外部に位置する物語作家の問題などを忌避しつづけてゆく限り、結局はテキスト世界の解釈に自閉してしまうのではないかとおもわれるのである。〈書かれたもの〉である以上は、物語作家が当の〈書かれたもの〉をどのようにして現出させているのか、という問題を無視することはできないだろう」(第十四章一節)。著者は、物語世界と現実世界の接点に紫式部なる物語作家を想定し、「紫式部という筆記編集者を介し、書写行為によつて物語世界と現実世界とが

つながれている」という。この二つの世界が「つながれる意義」を、夕顔巻の次の一節を取り上げて説述する。

日たくるほどに起きたまひて、格子手づから上げたまふ。い
といたく荒れて、人目もなくはるばると見たされて、木立
いと疎ましくもの古りたり。け近き草木などはことに見所な
く、みな秋の野らにて、池も水草に埋もれたれば、^(ア)いとけ
うとげになりにける所かな。別納の方にぞ曹司などして人住
むべかめれど、こなたは離れたり。^(イ)へ源氏」^(三)けうとくも
なりにける所かな、さりとて、鬼なども我をば見ゆるして
ん」とのたまふ。

右の傍線部(ア)をめぐって古注以来説がある。地の文なのに
会話調の文体印象を与える終助詞「かな」を含みもつことによ
る。傍線部(イ)は、作中の源氏の印象を掬い取りながらなされ
た語り手の言辭、「一体化評」表現と解される。著者はこうした
解に理解を示しつつも、その一方、作中に仮構化されている語り
手・書き手ではない實在の書写者の関与、作中の源氏に一体化し
た書写者の感慨を示すものだという。源氏物語の言葉は、「物語
世界の言葉と現実世界の言葉とが重なりあつたものとして受けと
めるべきだ」「物語内部に設定されている語り手、書き手たちの
言葉と解されてきた箇所も、場合によっては、現実世界の書写者
から発せられた言葉なのかも知れないのである」。特に最後の提
言など、著者の今後のさらなる検証がのぞまれる。

これまでも源氏物語に特徴的な、いわばグレイゾーンとも呼
びたいような表現を音楽用語で説明されることがあつた。しか

し、こうした音楽用語では説明しきれないと痛感しているのは、
ひよつとすると、本書の著者ではないか。本書の最終章は「源
氏物語」の「ヘテロフォニー」であつた。「物語世界内部の複数の
話声から現実世界の話声へとつらなり、かつはそれらがすべて重
なりあうという、『源氏物語』の言葉のありようを、ポリフォ
ニーとしてではなく、ヘテロフォニーの文学としてとらえるべき
だ」ともいわれる。音楽用語云々はさておき、最後に次のような
一節に注目しておきたい。「連綿とつづく語り手たち、書き手た
ちの連鎖の一員に加わるようにして、決定的な意味の容易に定め
がたい、多様な物語世界を「読む」という行為が、『源氏物語』
本来の言葉のあり方に適つていとおもわれる」(第十七章五
節)。「私流にいいかえれば、読者は一度は「語りの場」に身を置
く位の覚悟で作品と対峙する必要がある。研究の態度・方法は対
象とする作品の中にこそあるのだということを示唆してくれてい
るように思われてならない。

本書は、源氏学の中にしっかりと地歩を確立された労作であ
る。耳新しい知見とともに、わたくし自身、反省させられること
しきりであつた。「現実の作者」ならぬ「作者」の概念をどのよ
うに規定するのか。作品の心・作者の心の復元は不可能であるに
しても、表現の絶対性の追求と、その「近似値」を求める志まで
捨象してしまつていいのかどうか……。源氏学のためにも著者に
は、さらなる実践を重ねられ、この射程距離の大きいセオリーに
一層の磨きをかけてほしい。